

日本文学研究資料叢書

伊藤整・武田泰淳

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

伊藤整・武田泰淳

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

ISBN4-640-32501-0

伊藤整・武田泰淳

定価 3200 円

昭和 59 年 1 月 10 日 発行

編 者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山 崎 誠

101 東京都千代田区神田神保町 1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話03(291)1521~3番

振替口座 東京 9-40684

Printed in Japan

ISBN4-640-30083-2 C3393

『日本文学研究資料叢書』刊行に際して

日本文学の研究は、戦後三十数年を経て、再検討と新しい方法への模索が試みられ、転換期にあると言われております。そうした状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。

本叢書はそうした要請に答えて、日本文学研究の未来に賭けられた可能性のために刊行されたものです。

今や、国文学界も、マス・コミュニケーションの時代は避けられず、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、その氾濫は真の学問的交流を阻害するようになっていくようにさえ見えます。膨大な著作・雑誌・紀要等々が刊行され、それらのうちには、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったように、種々の困難が、そうした錯綜の上に重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした時代の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本叢書は有効的な役割を果たす決意で刊行されたものです。

本叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効的に提供することを目標としたものです。また現代の日本文学研究の動向が、本叢書によって総覧でき、今後の進路を導く羅針盤でありたいと希望しております。

日本文学の研究者、特に若い未来にのみ存在する研究者に、本叢書の趣旨が期待され、支援され、永続的な事業として継統される力を与えて下さるように願ってやみません。

目次

伊藤 整

『雪明りの路』批評抄 一

〔広告推薦文〕（百田宗治）／雑筆（抄）（百田宗治）／
 ／『雪明りの路』の出发点（服部嘉香）／『雪明りの路』合評その一（丸山薫）三
 ／同その二（飯島貞）三／同その三（小西武）三／同その四（三好達治）四／本書への
 言葉（高村光太郎）四／青雲荘雜記（中村恭二郎）四／『雪明りの路』の著者へ（小
 野十三郎）五／詩集「雪明りの路」の著者（田中兼通）八

〔座談会〕 新しき文学の動向に就て 岡田 三 郎・小林 秀 雄

——「新心理主義」文学——

板垣 鷹 穂・川 端 康 成・二
 久野 豊 彦・浅 原 六 朗
 新 居 格・中村武羅夫

再び心理小説に就いて 瀨 沼 茂 樹 元

——伊藤整著「生物祭」を讀みて——

「幽鬼の街」論争 三

文芸時評(五)(中条百合子)三／中条百合子氏に与ふ——四日付本欄文芸時評への抗議——
(伊藤整) 三／数言の補足——七日付本欄伊藤整氏への答として——(中条百合子)三／天上の
文学論——十日、十一日付本欄中条百合子氏への再答として——(伊藤整) 三／観念性と抒情
性——伊藤整氏『街と村』について——(宮本百合子) 三

伊藤整氏について……………十返 一…三

得能五郎——或る知性人……………森本 忠…三

鳴海仙吉へのてがみ……………福田 恆存…四

鳴海仙吉……………荒 正人…五

〔座談会〕『火の鳥』を中心とした伊藤整論……………白 井 吉 見・平 野 謙
花 田 清 輝・中 村 光 夫…六

『氾濫』批評抄……………三

〈文芸時評〉心理小説の限界点——完結した伊藤整氏の「氾濫」の手法——(遠藤周作) 三／
〈時評〉注目すべき文学的事件——『氾濫』と『森と湖のまつり』の根元的対立——(佐伯彰
二) 三／現代小説の可能性(平野謙) 七／近代日本文学の到達点——伊藤整の『氾
濫』を読んで——(奥野健男) 八／文学と金銭(荒正人) 八／『氾濫』と『森と湖のま
つり』(江藤淳) 八／伊藤整『氾濫』(寺田透) 九

伊藤整の「芸」の理論など 〈文芸時評〉……………山 室 静…六

『変容』批評抄……………二六

昭和十年代作家の回帰―伊藤整『変容』―(磯田光二)二〇〇/老人文学の結晶―伊藤整『変容』―(三浦朱門)二〇〇/書評>伊藤整著『変容』(平岡篤頼)二三

不思議な印象―『発掘』を中心に……………小島信夫…二七

〔座談会〕 昭和の文学 伊藤整……………瀬沼茂樹
奥野健男…二三
亀井秀雄

武田泰淳

閃爍する青春像―武田泰淳著『才子佳人』……………荒正人…二五

小説における「私」の設定―武田泰淳の場合……………白井吉見…二五

創作合評 「愛のかたち」について……………伊藤整
福田恆存…二五
神西清

『武田泰淳作品集』解説……………二五

第一卷(山本健吉)二五/第二卷(寺田透)二六/第三卷(高橋義孝)二五/第四卷(神西清)二六

武田泰淳の反思想的発想……………十返 肇…二七

加害者と被害者——武田泰淳をめぐる——	進藤純孝……二五
「森と湖のまつり」雑考……	小松伸六……二五
武田泰淳における「文化」……	佐々木充……二六
——『司馬遷』の成立まで——	
武田泰淳——「秘密」を中心にして——	重岡徹……二六
『ひかりごけ』……	吉田熙生……二九
武田泰淳論への試み その二……	小笠原克……三五
——『蝮のすえ』・その『戦後』への上陸——	
薬罐と空間——「風媒花」の方法——	黒井千次……三七
「富士」論……	重岡徹……四八
問ふことと書くこと——武田泰淳論——	松本徹……五九
武田泰淳論——中国への視座——	根岸隆尾……七〇
アジア体験の思想化——武田泰淳と竹内好——	松本健一……八四
言葉の焰——武田泰淳の小説——	富岡幸一郎……九三

*

解説……………曾根博義：三〇一

伊藤 整研究参考文献……………曾根博義：三二

武田泰淳研究参考文献……………曾根博義：三二

執筆者一覧……………三八

『雪明りの路』批評抄

〔広告推薦文〕

百田 宗治

『椎の木』を出すことになつてはじめて知合ひになつた詩人の一人であるが、その言葉がかくまでに作者自体と一致した詩人を私はあまり多く知らない。この作者は真に自分の言葉で語つてゐる。真の自分の言葉で自分だけの世界を語つてゐる、この作者の力強いところはそこにある。また吾々がこの詩人から学ばなければならぬものも玆にある。近頃ザラに出る新人の詩集のなかでは一頭地を抜いたものとして推挙して悔ひない。

〔椎の木〕第三号広告欄、大正一五年二月発行。原文無題

雑 筆（抄）

百田 宗治

同人伊藤整君の詩集「雪明りの路」が今月中（十一月）に椎の

木社から出る。既成の詩壇に關係なくひそかに僕の抱いてゐたこの隠れた刻苦のひとを紹介し得るのは何よりの歓びである。最近詩壇の弊害はいたづらに附焼刃の感覚多彩に走つて、言葉の綺羅を飾ることのみを以て豊富なる詩想と解するとき浅見者流の輩出であつた。僕は伊藤君の詩に一茎の培ひ、育て上げられた霜雪の菊花を見る思ひがする、その懷抱するところのものは彼自身を以て語らせるがよい、彼こそは土を知り、氣を感じ、自力を以て天を仰ぐ一茎の菊花である。諸君の翻説を望んで置く。近く同人の合評を載せる。

〔椎の木〕第三号、大正一五年二月発行

雑 筆（抄）

百田 宗治

多少飯島君に似通つて、個性的な形式を生かして詩を書いてる人に伊藤整君がある。この人の詩は飯島君の場合と違つて、その思想的な背景に何か強い積極的に働かさかけるものがあり、同時に純粹な抒情味に富んでゐる、飯島君伊藤君共に自由詩の正系を踏む詩人であり、その表現の堅実で、然も個々の言葉の注意深いニュアンス

に富んである点等字ぶべきところが多いと思ふ。

（椎の木」第五号、昭和二年二月発行）

『雪明りの路』の出发点

服部 嘉香

*

伊藤整氏の第一詩集を贈られ、読んで気持がよかつた。多くの人の処女詩集に見るやうなアンビシラスな焦燥も誇衒もなく、感覚建築の欺罔もなく、ありのままの素直さを以て一貫してゐることが氣持よかつた事である。「此處に集められたものを見てゐて私は涙ぐんでしまつた。何もかもが其處から糸をひく様に私に思出されるのである。之が今までの私の全部だ」と序文の末節にある。全くさうであらうと思ふ。今までの自分の全部であつて、そこに何らの誇張も虚偽もなかつたといふことは、尊いことである。序文にはつゞいて「……私の全部だ。なんといふ貧しさだらう」とあるが、これは謙抑に過ぎる。もしくは挨拶に過ぎる。「何といふ誇らしさであらう」と書きかへて差支ない。

作品と人格との、作品と生活との間に距離があることは詩人の最大恥辱とせねばならぬ。それがなければでも伊藤氏の出発はよい出発である。

*

どの詩人の初期の作風でもあるやうに、伊藤氏の作にも、外からの描写が多い。平面描写である。少しもこだはらず、氣取らず淡々と叙してゐるので、全体としての散文化的傾向を一層浅いものと見

せる危険はある。「雨の来る前」「白い障子」「秋」「良い朝」など、その他、平淡に過ぎるものが多い。

けれども、伊藤氏の平面描写は純粋叙述ではない。こゝに氏の長所がある。同時に、氏の作品は、自分の生活に根ざしてをり、いろ／＼の生活の姿態を現はしてゐる。こゝにも、氏の長所がある。

「白い障子」は平淡過ぎるが、「みんなは暖い夕食の箸をとる」の一句で救はれてゐる。「風」「その夜」「霜の朝」「夜」「街で」「夜明け」「故郷に目ざめる」「また月夜」などもそれだ。

*

しかしこれらは伊藤氏の作品の一面を示してゐるに過ぎない。氏には他の今一つの特色がある。それは内からの描写の詩だ。

内からの描写への表白に外ならない。これを示すものに二つの種類を伊藤氏は持つてゐる。

恋心を歌つたものが一。疑惑を歌つたものが二。そして恋心を歌つたものは、氏としてはもう過去の作風として残すに過ぎないだらうが、疑惑を歌つたものは、氏の今後の進展を示してゐる。

恋心を歌つたものには、幼稚なものもあるけれども、実にナイーヴな味はひが出てゐる。「また月夜」はその心持であり、同時に、その結局の「二人が嘘をついてゐたことがよくわかるだらう」に鋭い省察を見た、もう恋から落ちついてしまつたことを示してゐる。これで終を告げたとしてよい。

疑惑を歌つたものは、「大事な私」「世間の顔」以下九篇ばかりと、「社会」「糧を求める」「過敏」「思想」「言葉」「気軽さ」などの一群である。氏の思想の成長と共に、この方面にますます進んで行くことであらう。わたくしは特にそれを期待する。

すべてを通じて、伊藤氏の大きな正直と、深い素直さ、人柄のう

ま味がある。ありのまゝの詠歎からはありのまゝの人格を感受することが出来るといふことが、この一詩集によつて教へられた。

（「椎の木」第五号、昭和二年二月発行）

『雪明りの路』合評

その一

丸 山 薫

詩集「雪明りの路」をば翻いてゐる間、その肩にいつばい林檎いろの雪をば積らした著者が寒い風と一緒に這入つて来て、黙つて私の傍に坐つてゐるやうに思ひました。著者伊藤整君のふるまとは、雪の降りしく後志の国塩谷村の海岸であり、その詩の一句一句のあわひにも雪の匂ひが沁み込んでゐるやうに思はれるのです。

末技の表現にのみはしつてほんたうの詩をば失つた、否始めからそんなものは有つてゐないと云ふやうな顔をした新人とか云ふものの間に、真に自分の郷土ののすたるじあの上に魂をばはぐくみ育てた君のやうな人の出現をば、心から懐しく思ひます。

巻頭序の「一節」それにしても私は此處ではじめて物を言ふ様な気がする」また「此處に集められたものを見てゐて私は涙ぐんでしまつた」など、読んでゐて私も臉の熱くなるのを覚えました。

その二

飯 島 貞

詩集「雪明りの路」一巻の背景となつてゐるものは、素直な作者の純情であり、郷土の風物と恋情である。それらのものではなく、

作者の持つ思想を示し得ないものは、童話的性情がしからしめたものであるか、外国語に親んだその影響や自分に書き示すことを第一義とした詩壇じみない風容やがかくさせたのだと思ひます。この見方は或は私の謬見かも知れない。私は初めの方では「女」「十一月」「雪明り」終りの方では「女性に笑ふ」「面倒な言葉」「野の風」にしたしめたといふより愛誦した。前者は巻中の秀れたものであらう。個人的になるが素朴なこの詩集は私にとつて私の詩集「群の秋」とその時代を思ひ起させてなつかしまれる。

言葉が使駆することの巧さは、作者のまれな純情と同一の価値をもつものであらう。私はそれに敬意を表してゐる。

その三

小 西 武

「静かに見れば、ものみな自得すと云へり」伊藤整氏から詩集をいただいて、ぼくははからずも芭蕉の言葉を思ひ出したのである。「私が詩に頼り、私の詩情がまた、自信のない私に頼つて居る様であつた。」とふり返つてゐる氏は、今や過去の孤独に限りない愛惜の冥想をつづけてゐる詩人である。氏の孤独は無言である。氏の無言は、最も多くを思ひ、最も多くを語る沈黙であらねばならない。限りなき孤独の哀愁にひたりながら、黙々と不断的努力をつづけてきた氏の姿は、まこと孤独のみが芸術を生む証示でなければならぬ。この詩集を翻く人は片々敬虔な氏の姿をみるだらう。明るくて静かで、自己の歩みにのみ忠実な氏の姿をみるだらう。半年は雪に埋れてゐる北海道をうたつた詩に、暗いかげのつきまといつてゐない事を私は嬉しくも感ずるのである。霜天の菊の様に、何のこたわりもなく、自分自身の道を、どこまでもつきすすんでゆく氏に、然も尚、内省

的で、常に菊花の雅を失つてゐない氏の姿に、ぼくは心うたれずにはゐられないのである。充分の御返事もできない事を心苦しくも思ふが年末のいそがしさを御ゆるし願ひたい。一月十三日に京都支社では皆集る筈、その時御期待に背かぬ合評をやりたく思つてゐる。

その四

三好達治

君の恋愛には夜鶯が鳴いてゐる。お伽噺の瓜姫は黒い髪の毛を残して食べられてしまつた。それなのに、峠を登りつめた馬車馬が、またしても、過ぎし日の典雅な足なみを思ひ出す。そしてその眼下に、吹雪の忍路の村が覗かれる。

君のロマンチズムには、枝移りする夜鶯の羽音が聴える。優に愛しいこのフェアリーランドの音情は、まことにユニツクな青白い葩びらの光沢に満ちてゐる。粗暴な氣象の後の、憧憬に顫へる青空のやうな、ややにチエホフ先生式な、厭世思想と（そのために、君は屢々正しい憤怒を洩してゐる）犀利な觀察（それによつて、ともすれば忘れ勝ちな些細な出来事の美しさを、君は巧みにノートして呉れた）。

黒土の穴に

真白い豆を一つ一つ並べてゐる

（前後略、春日より）

かうした君の無造作な、明瞭な表現に、幾度か私は感嘆した。適確な写実的手法がロマンチズムの採光によつて、温藉なりズムを奏してゐる多くの秀れた詩篇を、一文にも及ぶ虎杖の北国から、伊藤君、君の齎して呉れたことを、私は限りなく懷しみ尊敬する。

（椎の木」第五号、昭和二年二月発行）

本書への言葉

高村光太郎

あなたの詩集を頂いてからもう二三度読み返しました。その度に或る名状しがたいパテチツクな感情に満たされました。チエホフの感がありますね。この詩集そのものもどこかチエホフの様な響がありますね。

（信天翁」創刊号広告欄、昭和三年一月発行）

青雲莊雜記

中村恭二郎

雪明りの路

暮れの押しつまつた日に美しい訪問客があつた。まだ少年なのだ。そして美しい哀しい物語をもつて居る伊藤整と云ふ未知の詩人の詩集だ。多忙なのに火の気もない室で一氣に読んで終つた。椎の木社の発行だが近來珍らしい調つた詩であつた。純情で貫いてゐるそれだけに深い深い嘆きを身にしみて感じる。自分は自分の詩集に恋の物語を入れたくないと思ふが、然し『雪明りの路』にある様な純情時代を追憶すると哀れ深い情に眼が熱くなるのだ。自分は丘の上の家で久しぶりで色々と想ひ出したりして、伊藤君の詩を一つ一つ美しく眺めた。もとより抒情詩集で、それ以外に享ける所はない。

然し老いて固くなつた人々の心をも一度優しい思ひ出に泣かせることはたとへ様もなく尊い仕事だと思はないか。

あやまち

逢はずにさへ居たら

過ぎた世の夢もおなじだと思つたのに。

見さへしなければ

忘れ得る日も来ると思つて居たのだ。

あゝ逢ふのではなかつた。

わすれる目とてなかつたと

泣いたそなたの襟足の白かつたことは。

その夜涙にうるんだ私の目に

余市の浜のかぶり火は

おそろしい薬火のやうであつた。

母のいとしい私の

身ひとつに秘めた不幸の大きさ。

あゝ逢つて これほど切ない思をするのなら

やがて嫁いで行くそなただ

逢はなければあはないで

おもひでるのは

物語りに似た二人の過去で済んだかも知れなかつたのだ。

月は 銀

今夜は月が銀のやうに清らかだ。

そなたは思ひ出さないか。

あゝ秋もたけ 虫の音は湧きたち

月は白い光をまして

それを見る私は耐へられない。

今夜はね 高いところに

あゝ月は銀のやうだ。

そなたが私のとうてい逃れ切れぬ姿となつたのを

それを

私は今また泣いてゐる。

決してそなたに逢ひたいと言ふのではない。

たゞこれからどんなに長いあひだ

そなたを忘れないで行くだらうと思ふと

私があんまりわびしくなるのだ。

まだこの様な優しいすゝり泣く様な詩がいくつもある。まるで夕暮に見る白いリングカナシの花盛りの様に夢の様な哀しい調子だ。読んで居ると泣けて仕舞ふ。

収められた詩には他に幼年時代を追憶して書いた優れた作品も数多い。山を越える電信柱の列の不思議な誘惑を唄つた『電信柱』、外語劇大会の楽屋の、お伽話にある様な空気にかし出された森の宮殿の幻想を綴つた『幕合』等ついでながら伊藤君の素張しい詩作者としての力量はこの終りなどに明かだ。即ち

私はいくつかの暗い階段を登つて

果てのない廊下をさまよひ歩いた。

私は森の宮殿の侍童であつたから。

ある扉で鍵穴をのぞくと

其処では

兎や猫や猿などの獣類が

衣裳を半分着て 白粉を塗つてゐた。

さて次の室では

姫さまが泣きながら靴をぬいでゐた。

三番目の室では

稚い道化役が そつと

ギターに触れてみて考へ込んでゐた。

私は暗い廊下を

恐ろしく冷たいドウームを過ぎ

次の階段の下つた所で、

明るい光の舞台に向つて

今の世の観客の波がどよめいてゐるのを見た。

この結びなど、吾々の及ばぬ巧智な技巧と周到な用意を見せてゐる。これ程の詩人が静かに埋れて居たのだと思ふと、騒々しい今の若い詩壇が殊更嫌になる。

（『地上楽園』第二巻第二号、昭和二年二月発行）

『雪明りの路』の著者へ

小野 十三郎

『雪明りの路』それは私を有頂天にさせた詩集の名です。著者伊藤、藤、整、君と私は一面識ありません。この詩集によつてはじめて、たつた今、その人を知つたのです。だのに、彼はもうすっかり私を擒にしてしまつた。私もすっかり彼が氣にいつちまつた。私はすぐ著

者宛にお祝ひの私信をしたためやうと思つたが、どうしてもそれだけでは物足りない氣がする。私の喜びを、ひとりのものとしなないで、もつとたくさんの人たちにも知つてもらひたい、と云ふ欲望を制しきれなくなつてしまつた。で、私はこの『若草』の幾頁かをかりることに決心します。こんな文章でよく『雪明りの路』の読者が一人でも増えたら、私は著者宛の手紙を犠牲にしてしまつたことを少しも後悔しないだらう。

*

「雪明りをよく知り、永久に其処を辿るあの人々に、私は之等の詩篇を捧げる。」

伊藤君あなたの詩には何よりも先づ朗らかな健康な生命の力が満ち溢れてゐる。あなたは詩集の扉にイエツの詩を引用されてゐるが、そしてあなたは大変イエツがお好きなやうですが、それはあなたの詩、そしてあなたと云ふ人を理解するための、私にとつても最も都合のよい鍵になります。あなたの本質はやはり『抒情詩』でせう。あなたは全く純真な、そして純粋な曇りのない透明な性格の人です。あなたは誰よりもよく深く詩の本質を理解してゐる。あなたは深い大きな共感、そのむしろ潜在的な力強い伝播力を真底から把握してゐる。あなたのリアリスチックな表現、描写の中に、どれだけの沢山の夢がひそんでゐることか。おそらくあなた自身も氣がつかない程だ。あなたの滋味で素直な表現の中に私はつねに大きな『特異性』を発見する。『特異性』それは決して、病的な意味に於てではなく、末梢神経的な意味に於てではなく、又一種の変態的な奇矯さに於けるところのものではない。それは実に、あなたをして、單なる『抒情詩人』としての安易さから、はるかに、あなた自

身を隔絶せしめるもの、人生に対する真剣な態度です。即ち、あなたの視野は小つばけな個性の虫眼鏡ではない。多彩な昆虫の複眼に映ずる風景ではない。あなたの眼は社会の眼だ。あなたの眼であつて、同時に、あなたを囲繞し、あなたを育成し、且つ絶えずあなたを見守つてゐるところのものゝ眼であります。

あなたの視野はひろい。ます／＼拡大されてゆくでせう。

あなたの詩の生長は、すでにあなたの中なる『懐願的』な感傷を充分に吸収し尽したやうだ。營養はすでに充分だ。あなたの生命の力は、新しく未来に向つて方向転換をこゝろみつゝある。

過渡期――

いや、この言葉はあなたの場合にはあてはまらない。あなたの生活に対する信念は、出発点から現在に到つて、なだらかに盛りあげられ強められてきてゐる。都会居住者にみる心理的動揺や消極的なニヒリズムは、あなたの胸壁を洗はない。あなたは健康だ。土の臭ひがする。北風のもつてゐる『意志』があなたの額に刻みつけられてゐるやうだ。

イエツはあなたの『慰安』である。

チェホフはあなたの『持味』である。

そしてあなたのこれからは、あなたの未来は――

「夢見る力を失つたものは生きてゐられない。」

あゝ、あなたは明日どんな夢を見るだらうか。

憂鬱な夏

もう私は、こんな濃い夏に厭きてしまつた。

藪の、ぜんまいわらびは、せい一杯ののびて

その下を

甲虫や 蛙や 青い小人などが歩くのだらう。
この海のやうな緑は

私の目付をすつかり染めたに異ひない。

山鳩まで

あんな林の奥で

なんて眠たげに鳴くんだらう。

木々は白く葉をかへしてそよいで

馬車が かたことと谷の上を行くのも見えなない。

空はからりと晴れ切つても

胸ときめかす思出の一つもないうちに

すぐ

この夏もすぎてゆくし

あゝ何時になつたら

私の世界を驚かすことが起るのか。

それまでは

幾年でも私はかうして

ありとも知れない夢を見つゞけるだらう。

かつての女ともだちは

皆 恋を知つたり 蒼白い人妻になつたり。

さうして 十八のぼくも 十九のぼくも

独りぼつちの寂しい後姿で

あの落葉松の奥ふかく消えて行つたのだ。

世間の顔

お前の顔は長い間の表情で

兜のやうにこはばり

お前の眼は古い池で

藻のやうなものが浮いてゐる。

そしてきつい酒をすこしばかりなめて

世の中はさうはならないんだと言ふ。

お前は何かしら

私の知らない経験でうめられてゐるやうだ。

あいつら

知つてゐるか。

みんな だまつて

仕事を相手にして静かにしてゐるが

あいつらが一度気付いたら どうなるか知つてゐるか。

あゝして あいつらは無智だから

今の所 何も知らないで仕事をしてゐるが

あいつらが気付いてみる。

だまされて来たのが解つてみる。

そんな理窟なんか おどしなんか もう駄目だから。

もう何もおさへることは出来ないから。

おそろしくないか。

無智で 向ふ見ずで

蟻のやうに無数な彼等が考へついたときは

もう駄目だと思へ。

だまして だまして 築き上げてきた今までの

絶てがくつがへる日だと思へ。

*

以上三篇必ずしも代表的なものとは云へないが、賢明な読者はい

づれが、伊藤君の未来を暗示してゐるか、たゞちに了察されること

だらう、と思ふ。まだ書きたいこともあるが指定紙数も尽きたから

後日に割愛する。

最後に、私は北海道忍路郡塩谷村の未知の友、伊藤整君に満腔の

ブラボーをおくる。

(「若草」第三巻第五号、昭和二年五月発行)

詩集「雪明りの路」の著者

田 中 兼 通

—

新潮社版二八年新文芸日誌「詩壇の一年」百田宗治氏執筆 中二
七年の主だつた詩集中に、伊藤整著「雪明りの路」一項を見出すで
あらう。詩壇の宿老中堅の著作に伍してこの「雪明りの路」の著者
として爰に挙げられてゐる伊藤整の名は詩壇に最も耳新しい存在
である。詩話会解散で不統一と蕪雜の感あつた二七年の詩壇に劈頭
其著「雪明りの路」を投げ付けて堅く鎮した詩壇の扉を排した彼の
進出は彗星の感があつた。伊藤整何者ぞ……私は二七年に華々しく
デビューした「雪明りの路」の著者に就いて語らねばならぬ。

二

大正九年小樽余市間の通学列車中に制服制帽姿の白哲の青年が書